

八王子市保健所 片山珠愛 橋本千枝子 渡辺まり子 小池明子 佐藤てるみ
波塚美千代 守屋広子 竹内美貴 大導寺康平 福島千尋

1 はじめに

八王子市は人口 56 万 2036 人（平成 30 年 3 月末日現在）の中核市であり、市内には 16 ヶ所の精神科病院、19 ヶ所の精神科診療所がある¹⁾。

八王子市保健所では日頃から、病院や訪問看護ステーション、高齢者あんしん相談センター、地域活動支援センター等と連携し、精神障害者の支援を行っている。その中で、精神科クリニックとやりとりをしているケースは限られている現状があった。その理由として、保健所の業務や役割が十分に知られていないことや、つなぐ方法がないことが考えられた。そこで、理由や課題を明らかにし、連携を強化する目的で市内 17 ヶ所のクリニックを訪問し、連携等に関するアンケート調査依頼と保健所事業の周知を行った。実際に訪問・調査を行った中で見えてきた課題について考察したことや今後の取り組みについて検討したことを報告する。

2 調査方法・内容

平成 30 年 6 月から 7 月に調査協力の同意を得られた市内 17 か所の精神科クリニックを訪問し、保健所の活動内容の認知度、過去の相談の有無、相談方法と結果や保健所に求めているもの等について複数回答で調査した。同時に、保健所の事業内容をまとめたものを元に、事業説明と地域での保健師によるケース支援について説明した。また、ケース支援における連携部署の案内を合わせて行った。

クリニックにおいて保健師が事業説明、聞き取りを行った職種は精神科医が 14 名、事務職員が 3 名で、アンケートについては後日 FAX にて回答をもらった。

3 結果

すべてのクリニック、19 名の精神科医より回答

を得ることができた。保健所の活動については 18 名の医師は知っていると回答したが、実際に保健所を紹介したことがある医師は 11 名であった。紹介したことがない医師は 7 名で、理由としては「他機関を直接紹介している」が 57%、「どういう患者を紹介していいかわからない」が 43%と多かった。

(表 1)

表 1 7名の医師が保健所を紹介したことがない理由

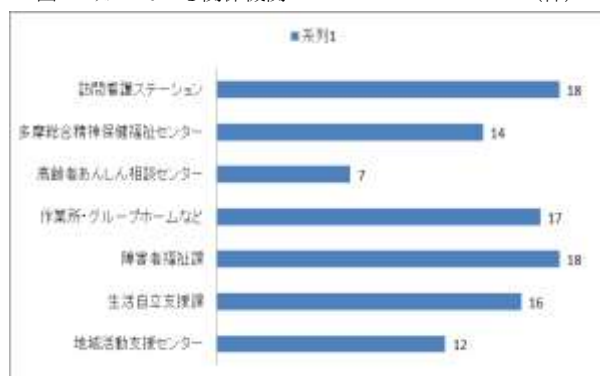
項目	人数 (7名中)	割合 (%)
1 業務内容がわからなかった	2	29
2 連絡をとったことがなく躊躇した	1	14
3 どういう患者を紹介していいかわからなかった	3	43
4 他機関を直接紹介している	4	57
5 すすめたいと思う人がいなかった	2	29

保健所に実際につないだ方法としては口頭のみ、メモを渡した等があった。紹介したがつながらなかったという回答は 2 件で、口頭のみでつないだと回答したクリニックであった。保健所につながったと回答したクリニックからは、連携がとりやすくなったという意見もあった。

紹介するにあたりあった方がよいものは、チラシ等の媒体が 14 件、事業説明が 10 件であった。

保健所以外の機関の認知度は訪問看護ステーションと障害者福祉課が 95%と高く、次いで多摩総合精神保健福祉センターが 74%、地域活動支援センターが 63%、高齢者あんしん相談センターが 37%であった。(図 1)

図 1 知っている関係機関 (件)



保健師に求めたいものでは患者の地域生活での見守り支援が13件、関係機関とのつながりが11件、保健所事業を利用した関わりが12件と同数程度で、その他2件はいろいろな機関の役割分担、法律を含めた制度の改善という意見であった。

4 考察

近年、病院から地域へという地域移行がすすんでいるが、精神障害者が必要な支援を受けるための関係機関との連携はまだ十分ではないと考えられる。そのため、より充実したネットワークの構築が求められている。今回、直接保健師が足を運び調査を行うことで得られた成果として①地域での課題の把握②保健所が取り組むべき課題の把握③顔の見える関係づくりができたことがあげられる。これらについて詳しく述べていきたい。

① 地域での課題の把握

地域で行う事業や支援機関の情報が十分でなく、必要な支援や事業につながらなければ、対象者の課題解決は難しい。そのため、各々の関係機関が互いの役割を知り、対象者についての共通認識を持った上での支援が必要である。今回の調査で認知度が低かった関係機関は、クリニックと直接の関わりが薄いことが考えられる。また、クリニックの多くはPSWがいないことで、連絡のとりやすさに差があると考えられる。そのため、地域の関係機関がクリニックとの連携を意識していくことも必要であり、こうした活動が、地域ネットワークの充実、発展につながると考える。

② 保健所が取り組むべき課題の把握

保健所を知っていても、どのような患者を紹介していいかわからない等の理由で、つながっていないケースがあることがわかった。そのため、保健所の役割として、ケースの同行や連絡を通して日々の関係構築や事業の周知を行うことが必要である。また、紹介しても口頭だけではつながらないケースがあるため、保健所へつないでもらうための手段としての媒体作成・配布を行うことも今後の課題といえる。

③ 顔の見える関係づくり

今回精神科クリニックをまわり、保健所事業や役割について詳しく周知することができた。また、保健所側も、クリニックの情報を得ることができた。そのため、保健所、クリニックともに相互の状況を共有できたことで、対象者に合ったクリニック紹介ができるようになったことや、連絡をしやすい顔の見える関係づくりができたと考えられる。

アンケートで保健師に求めたいものを調査したが、地域で生活する精神障害者にとってより充実した支援を行うには、地域生活での見守り支援や関係機関とのつながりを充実させることで必要な保健所事業の利用にもつながると考えられる。保健所保健師としてクリニックが求めたいものに応える努力をすることも必要である。

5 おわりに

日々、相談を受ける中で医療につながっていても精神疾患があるために生活に困っているケースは多い。実際に、精神科に通院する患者の数も増えている²⁾。地域で市民が精神疾患を持っていても安心して生活を送る上で、地域のかかりつけ医として関わる精神科クリニックは重要な存在である。また、クリニックが病院と比較して敷居が高くないと感じる患者も多く、相談の中でも「クリニックになら通院してもよい」という声も多い。こうしたクリニックと連携を図ることは、より多くの患者のニーズに合った支援を行うことにつながる。

訪問調査後、クリニックから保健所デイケアを紹介されたケースや、保健所を紹介するメモを持って来所するケースがあり、実際に連絡や相談も増えてきている。これは顔の見える関係づくりが構築されてきたためと考えられる。今回明らかになった課題に取り組む中で、今後も各機関との連携をより深めて、包括的に支える地域ネットワークの構築に取り組んでいきたい。

参考文献

- (1) 保健師ジャーナル Vol. 73 No. 08 2017 参考資料
- (1) 平成30年度版「道しるべ」P4, P14
- (2) 厚生労働省「患者調査」